伊藤左千夫歌碑

所在地　長野県塩尻市広丘原新田 177　広丘郵便局前

信州数日　　明治四十二年八月　　左千夫

柿の村人子の寓居広丘村にあり、二十三日、篠原志都児と二人夕され路をたどる。広丘は古の桔梗が原の一隅なりと云う。民家物さびて古を思はしむ。

虫まれに月も曇れるほのやみの野路をたどる
　吾が影もあやに

いにしへの事を思ひつゝさび家を
　暗き林をかへりみるかも

家作りもものしきを煤さびて
　蚕飼に暗し世の移りかも

碑陰

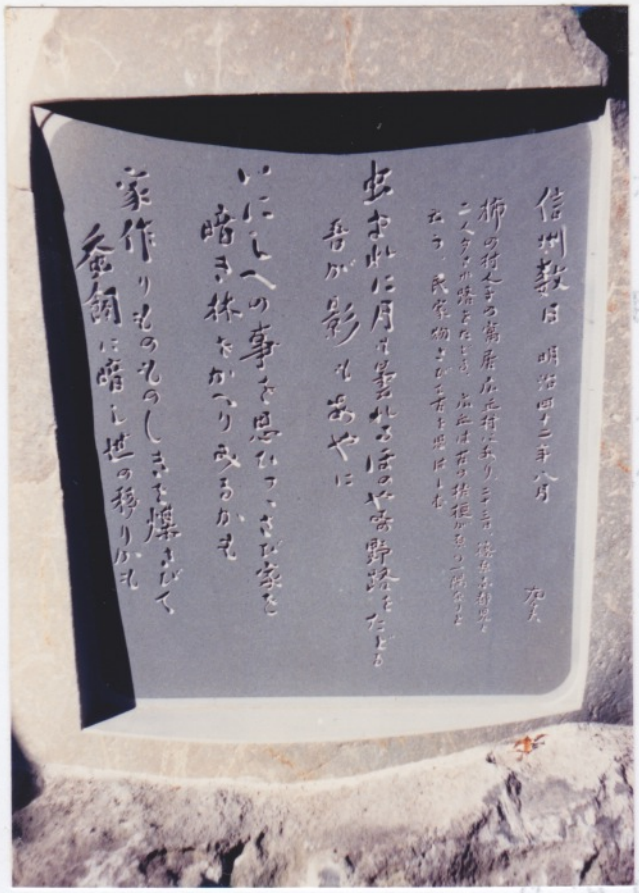
昭和六十二年五月十七日建之

広丘郵便局長　小松啓男

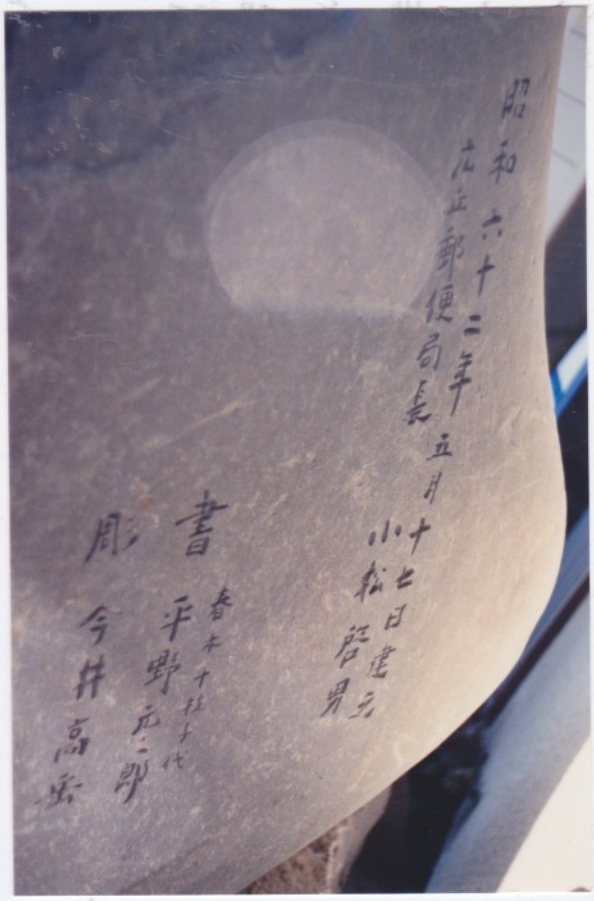
書　春木千枝子代

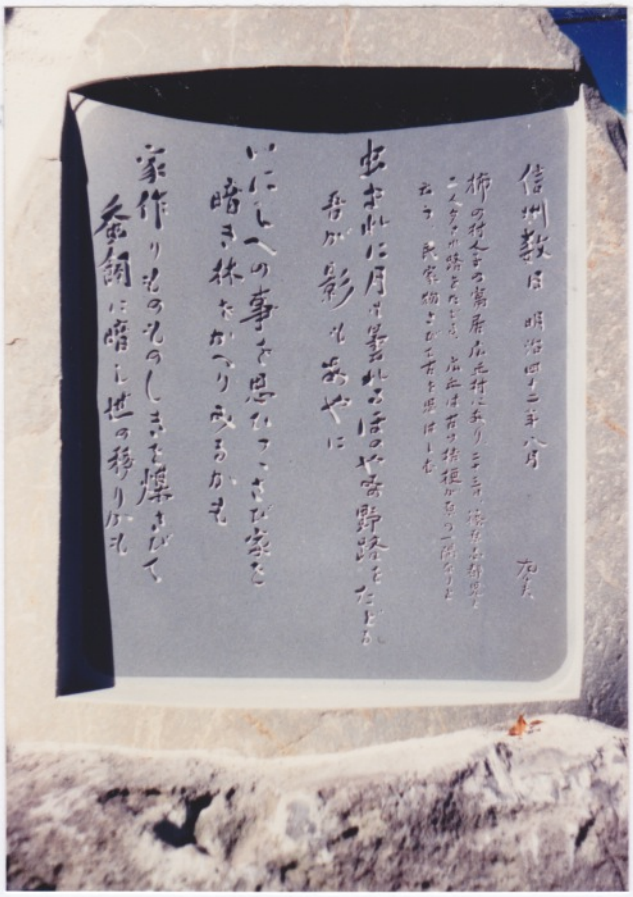
平野元二郎

彫　今井　高岳


信州数は　明治四十二年八月
柿の枝ものの葉居広瓦村に移りこの辺、接待の茶屋
二人夕方が暗くなると、広瓦は青の接根が点の一階なり
なり、民家物さびて青を思はしむ
虫鳴く秋に月は雲れる宿のや寄野路をたどる
吾が影もあやに
いにしへの事を思ひつ、さびた家を
暗き林をかへり見るかも
家作りものものしきまで爛まばて
桑飼に暗し世の移りかれ

好
お伺いします


昭和六十二年
広瓦郵便局長　五月十七日建立
小松啓男
書　春木十枝子
平野元二郎
彫　今井高安


信州数は　明治四十二年八月
柿の枝ものの葉居広瓦村に移りこの辺、接待の茶屋
二人夕方が暗くなると、広瓦は青の接根が点の一階なり
なり、民家物さびて青を思はしむ
虫鳴く秋に月は雲れる宿のや寄野路をたどる
吾が影もあやに
いにしへの事を思ひつ、さびた家を
暗き林をかへり見るかも
家作りものものしきまで爛まばて
桑飼に暗し世の移りかれ

伊藤左千夫歌碑

所在地　長野県松本市本郷町浅間温泉　桜ケ丘丘上

秋風の浅間のやとり
朝つゆにあめのと
開く乗鞍の山　左千夫

碑陰

伊藤左千夫先生明治四十三年八月當地来遊時之作ニシテ拈華庵藏スル所ノ短冊ヲ擴大セルモノ也刻シ以テ奉祝ノ意ヲ表ス

昭和五年　端午節　湯誌

伊藤左千夫歌碑

所在地　長野県松本市浅間温泉　桜が丘 丘上

秋風の浅間のやとり
朝つゆにあめのと
開く乗鞍の山　左千夫

紀元二千六百年記念
浅間温泉有志者建之

碑陰

伊藤左千夫先生明治四十
三年八月當地来遊時之作
ニシテ拈華庵蔵スル所ノ
短冊ヲ擴大セルモノ也刻
シ以テ奉祝ノ意ヲ表ス
昭和十五年 端午節 温山誌

伊藤左千夫先生明治四十
一年八月當地来遊時之作
ニシテ杉華庵藏スル所ノ
短冊ヲ擴大セルモノ也ル
ヲ以テ奉祝ノ意ヲ表ス
昭和十五年端午節 温山

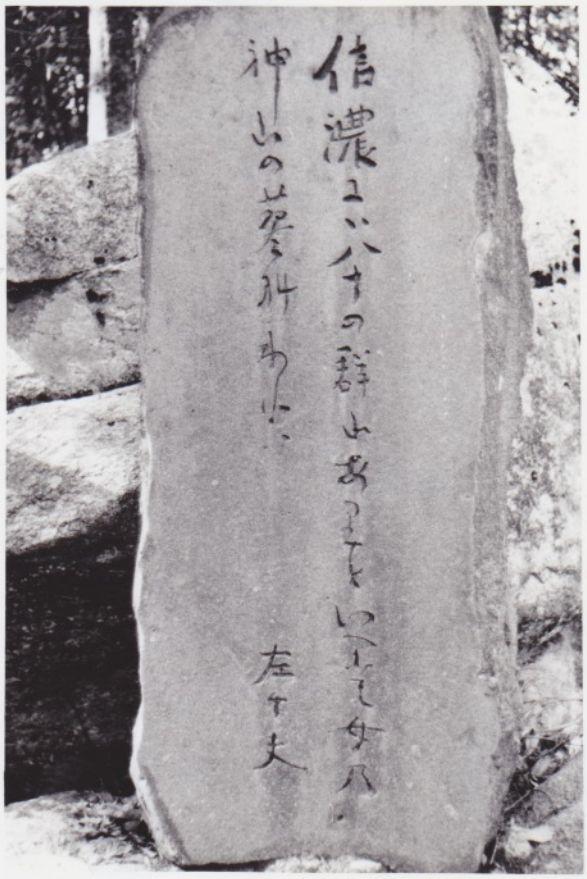
伊藤左千夫歌碑

所在地　福岡県福岡市城南区片江南町 4-41-12　文学碑公園内

信濃には八十の群山ありといへど女の
神山の蓼科われは　　左千夫

碑陰
文字なし

信濃三八十の群山あつまりいでて女八
神山の芝刑あり
左千夫


信濃三八十の群山あつまりいでて女八
神山の芝刑あり
左千夫

井上康文詩碑

所在地　神奈川県小田原市城山三丁目　小峯浄水地　東側

梅は古き枝に
蕾をつけず
新しき青い梢に
花をひらく

井上康文

碑陰

詩人　井上康文は明治三年（一八七〇年）六月二十日小田原に生まれ　昭和四十八年（一九七三年）四月六日東京にて歿す。
詩誌「民衆」創刊に参加・著書に「梅」「天の糸」「独白」その他多数。
昭和五十五年四月
井上康文の詩碑を建設する会

略歴

井上康文　本名　康治（やすじ）　明治三十年六月二十日　神奈川県小田原市幸町に生まれる　東京薬学校卒業　昭和四十八年四月十六日歿す　享年七十五歳

井上康文詩碑

所在地　神奈川県小田原市城山 3-29-1　小峯浄水場 東側

梅は古き枝に
蕾をつけず
新しき青い梢に
花をひらく

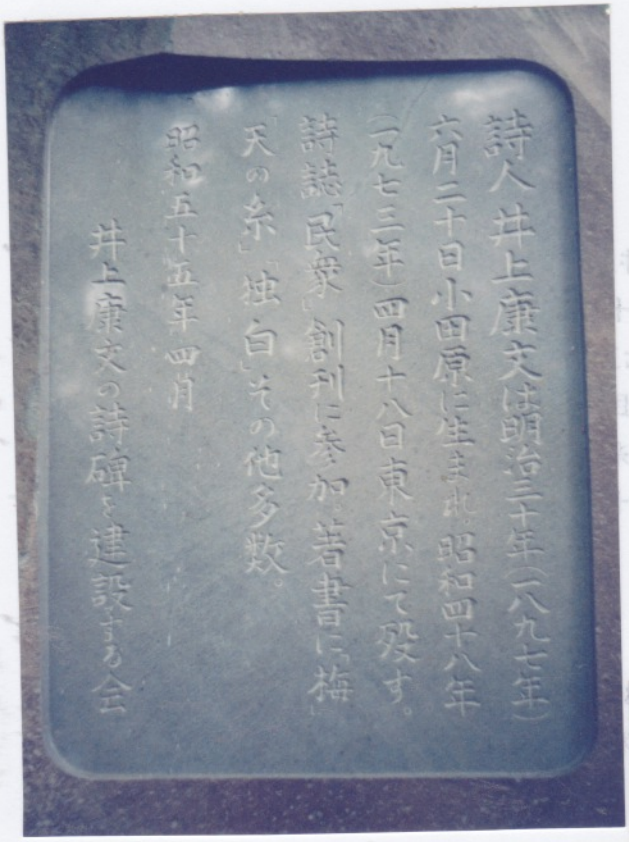
井上康文

碑陰

詩人 井上康文は明治三十年(一八九七年)
六月二十日小田原に生まれ、昭和四十八年
(一九七三年)四月東京にて歿す。
詩誌「民衆」創刊に参加。 著書に「梅」
「天の糸」「独白」その他多数。
昭和五十五年四月
井上康文の詩碑を建設する会

略歴

井上康文 本名 康治(やすじ) 明治 30 年 6 月 20 日 神奈川県小田原市
幸町に生れる 東京薬学校卒業 昭和 48 年 4 月 18 日歿す 享年 75 歳


詩人井上康文は明治三十年(一八九七年)
六月二十日小田原に生まれ昭和四十八年
(一九七三年)四月十八日東京にて歿す。
詩誌「民衆」創刊に参加著書に「梅」
「天の糸」「独白」その他多数。
昭和五十五年四月
井上康文の詩碑を建設する会

梅は古き枝に
蕾をつけす
新しき青き梢に
花をひらく
井上康文

井上康文詩碑
「民衆詩人」といわれた井上康文（本名康治）は、明治三十年小田原城下町屋敷（本町二丁目四番三十八号）で、染物業井上栄次郎の二男として生れた。小田原高等尋常小学校（現在の本町小学校）から、東京農業学校（現東京農業大学）に進み、本業農業家を継ぎ、東京市役所等に勤務した。その間、民衆詩人福田正夫や、白秋等の「詩と評論」の同人となり、作品を発表した。昭和五年一月、福田正夫等と同人誌「民衆」を発刊するなど、その詩作活動は盛んで評価された。大正八年春陽堂「新小説」の記者となり、以後文学生活に入り、「愛する者」、「愛子詩集」、「天の糸」など数多くの作品を発表し、「経済学」は教科書「現代国語読本」に収録されている。この碑は、昭和四十八年四月十八日、病により七十六歳でその生涯を閉じた、氏の功績を記念したもので「井上康文の碑」を建設する会によって、昭和五十五年六月一日に建設されたものである。

井上武士作曲碑

所在地　群馬県前橋市荒牧町四二　群馬大学構　教育学部本館横

碑陰

うみ

五　線　譜

井上武士

レリーフ

うみはひろいなおおきいな

五　線　譜

つきがのぼるしひがしづむ

林柳波作詞　　作曲　井上武士

井上武士先生略歴（1894-1974）

明治２７年８月前橋市五代町生　芳賀小　群馬県師範
東京音楽学校卒業　台湾総督府付属女学校　長野県師
範　横浜市役所　東京高師・教育大付属　東京芸大
洗足音楽短大　東京声専音楽　東京音大（学部長）
日本教育音楽協会々長　同声会々長

主なる作品・著書

「チューリップ」「うみ」「うぐいす」「菊の花」
明治音楽教育百年史　音楽教育法　日本唱歌集

１９７５・１１建之

群馬大学教育学部同窓会　群馬県音楽教育協会
同声会群馬県支部　前橋市民音楽連盟　芳賀地区協賛会
企画　後藤重樹　レリーフ　儀部勘次

井上武士作曲碑

所在地　群馬県前橋市荒牧町 4-2　群馬大学構内 教育学部本館前

（全て横書き）

う　み

五　線　譜　　井上武士

うみはひろいなおおきいな　　レリーフ

五　線　譜

つきがのぼるしひがしづむ

林柳波作詞　作曲　井上武士

碑陰(横書き)

井上武士先生略歴(1894-1974)

明治 27 年 8 月 前橋市五代町生　芳賀小　群馬県師範
東京音楽学校卒業　台湾総督府付属女学校　長野県師
範　横浜市役所　東京高師・教育大付属　東京芸大
洗足音楽短大　東京声専音樂　東京音大(学部長)
日本教育音楽協会々長　同声会々長

主なる作品・著書

「チューリップ」「うみ」「うぐいす」「菊の花」
明治音楽教育百年史　音楽教育法　日本唱歌集

1975・11 建之

群馬大学教育学部同窓会　群馬県音楽教育協会
同声会群馬県支部 前橋市民音楽連盟 芳賀地区協賛会
企画　後藤繁樹　　レリーフ　礒部勘次

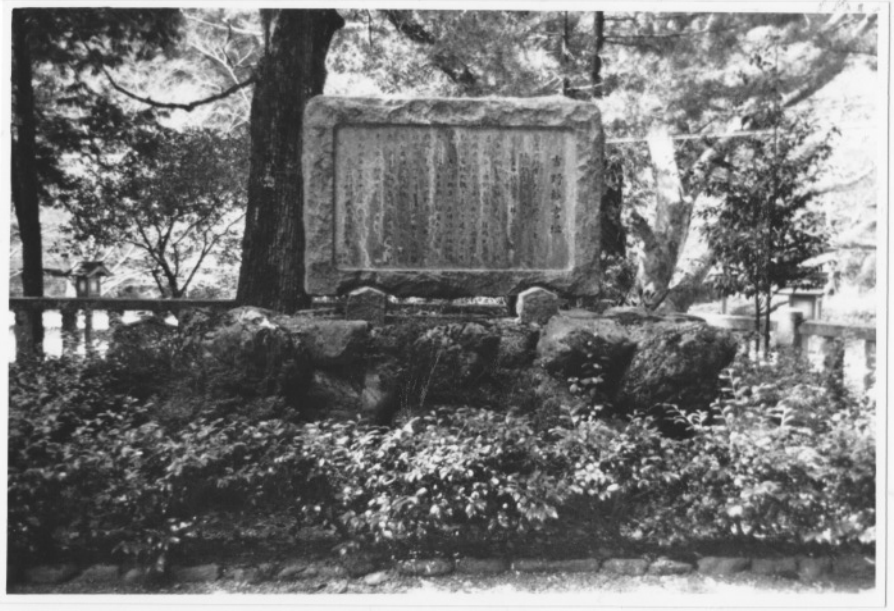
うみ
うみは ひろいな おおきいな
つきが のぼる しずむ
松柳淑作詞
作曲 井上武士

うみ
うみは ひろいな おおきいな
つきが のぼる しずむ
松柳淑作詞
作曲 井上武士

井上武士先生略歴（1894～1974）
明治27年8月前橋市五代町生　芳賀小　群馬県師範
東京音楽学校卒業　台湾総督府付属女学校　長野県師
範　横浜市役所　東京高師・教育大付属　東京芸大
洗足音楽短大　東京声専音楽　東京音大（学部長）
日本教育音楽協会々長　同声会々長
主なる作品・著書
「チューリップ」「うみ」「うぐいす」「菊の花」
明治音楽教育百年史　音楽教育法　日本唱歌集
1975・11 建之
群馬大学教育学部同窓会　群馬県音楽教育協会
同窓会群馬県支部　前橋市民音楽連盟　芳賀地区協賛会
会員　後援者　レリーフ　碑文動決

井上通泰歌碑

所在地　奈良県吉野郡東吉野村小公七　丹生川上中社境内



史蹟
吉野離宮址

書　吉良奈口森

碑陰

吉野離宮址

離宮（とうみや）の行幸（みゆき）のたびに珍らしと
蛙の聲を聞しめしけむ

宮中顧問官　井上通泰

萬葉の歌に多く詠まれ又しば〳〵蟻通ひ給ひし吉野離宮は　雄略天皇が御獵せられた小牟漏岳の麓秋津野の野辺に宮柱太敷きまして建てられてゐた　そこは丹生川上神社の神域地でこの辺りから奥に離宮があったと推定される　この対岸には大宮人の邸宅があって川を堰止め舟を泛べ離宮に出仕のため朝な夕な競ふて渡った　今も宅址の名残である御殿や軒先と云ふ地名が残ってゐる

昭和四十一年十月十日
東吉野村郷土史蹟顕彰會

略歴

井上通泰　本名　泰藏　慶応三年十二月二十四　播磨国姫路に生まれる　東大医学部卒業　昭和十六年八月十五日歿す　享年七十四歳　墓は東京都府中市多磨町　多磨霊園十九区一種十二側二十四番にある

井上通泰歌碑

所在地　奈良県吉野郡東吉野村小967　丹生川上中社境内

史　蹟

吉　野　離　宮　址

森口奈良吉書　　(以上横書き)

碑陰(縦書き)

吉野離宮址

離宮(とつみや)の行幸(みゆき)のたびに珍らしと

蛙の聲を聞しめしけむ

宮中顧問官　井上通泰

萬葉の歌に多く詠まれ又しば／＼蟻通ひ給ひし吉野離宮は　雄略天皇が御猟せられた小牟漏岳の麓秋津野の野辺に宮柱太敷きまして建てられてゐた　そこは丹生川上神社の神域地でこの辺りから奥に離宮があったと推定される　この対岸には大宮人の邸宅があって川を堰止め舟を泛べ離宮に出仕のため朝な夕な競ふて渡った　今も宅址の名残である御殿や軒先と云ふ地名が残ってゐる

昭和四十一年十月十六日

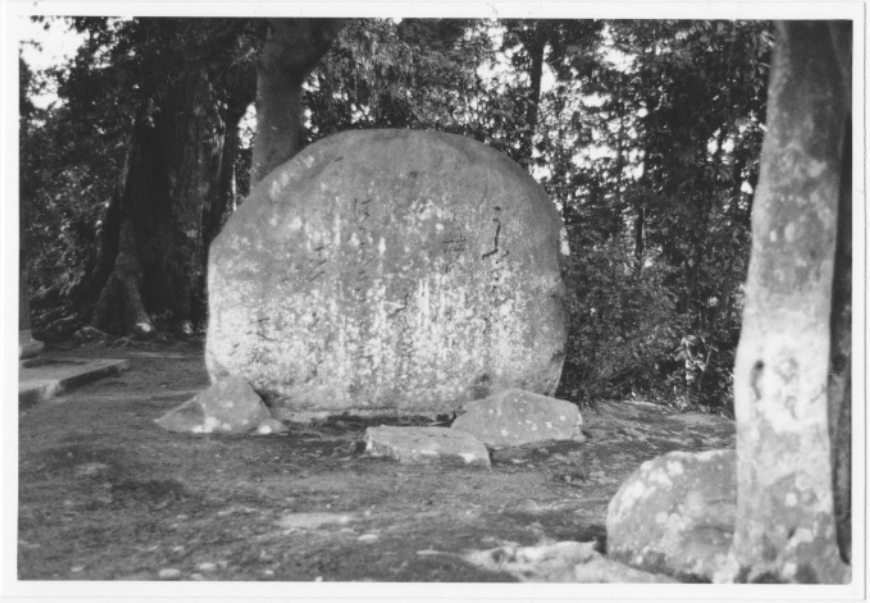
東吉野村郷土史蹟顕彰會

略歴

井上通泰 本名 泰蔵 慶応2年12月21日 播磨国姫路に生まれる 東大医学部卒業 昭和16年8月15日歿す 享年74歳 墓は東京都府中市多磨町 多磨霊園19区1種12側24番にある

史蹟
吉野離宮址

吉野離宮址



井上通泰歌碑

所在地　兵庫県神崎郡福崎町西治（さいち）観音寺　鐘楼横

うふすなの
杜のやまもゝ
ふる里は
はかなきことも
こひしかりけり
通泰

碑陰

十方の賛助を得て
昭和四十年五月之を建つ
発願　文　学　圏　社
協賛　福崎町教育委員会
同　観　音　寺

井上通泰歌碑

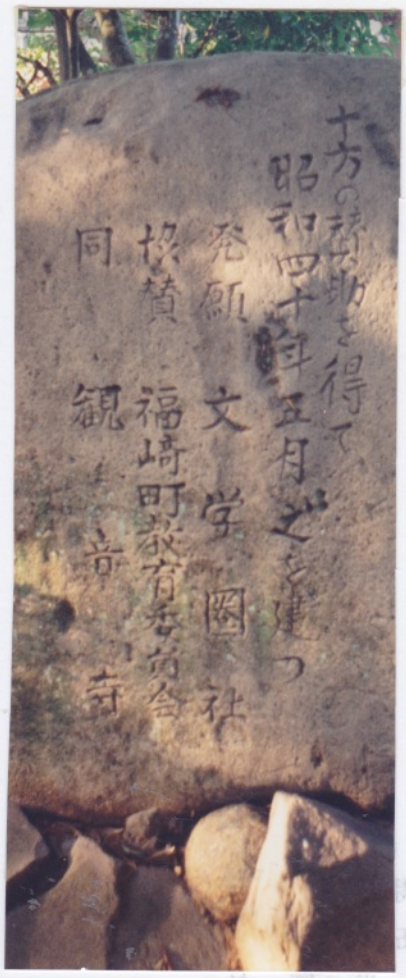
所在地　兵庫県神崎郡福崎町西治(さいじ)1169　観音寺 鐘楼横

うふすなの
杜のやまもゝ
ふる里は
はかなきことも
こひしかりけり

通泰

碑陰

十方の賛助を得て
昭和四十年五月之を建つ
発願　文学圏社
協賛　福崎町教育委員会
同　観音寺


十方の諸助を得て
昭和四十年五月之を建つ
発願 文学圏社
協賛 福崎町教育委員会
同 観音寺

井上通泰記念碑
うぶすなの樹のもとにまうることは
ほかなることもこひしかりけり 通泰
先生は例年五月二日新宮家誕生祭当日
の時詠まれた懐郷の歌である。先生は慶応二年
学者松岡約斎の二男として出生、十三歳にして古典
長兄井上頼圀の養子となり、長じて国学に
学んで医学博士の称号を得たが、なお修学に
精進し明治四十年東京帝国大学入学、引
続き皇室御医に任ぜられ、数多くの歌集を残され
た。晩年の住居を移され、郷土福崎町に帰
関係寺歴史のあり、昭和十六年七月八日
永眠された。

井上正夫記念碑

所在地　神奈川県横浜市港北区日吉本町一四七番　旧居跡

井上正夫之碑

高橋誠一郎書

碑陰

井上正夫は俳優であった本名小坂勇一明治十四年伊豫國砥部村に生れた新派の大幹部となり映画にも出演した新時代劇協会井上演劇道場等を創り劇界に貢献した昭和廿四年日本藝術院會員に列し藝術家として榮譽を受けた翌廿五年二月七日相州湯河原で急逝した俳優生活五十餘年を通じて常に熱と努力の人でありその重厚で滋味ある藝格は劇界の至寶であった

この碑は昭和廿六年六月故人を敬慕する全国の有志の醵金で建立された

井上正夫記念碑

所在地　神奈川県横浜市港北区日吉本町 2-34　旧居跡

井上正夫之碑

高橋誠一郎書

碑陰

井上正夫は俳優であった本名小坂勇一明治十四年伊豫國砥部村に生れた新派の大幹部となり映画にも出演した新時代劇協会井上演劇道場等を創り劇界に貢獻した昭和廿四年日本藝術院會員に列し藝術家として栄譽を受けた翌廿五年二月七日相州湯河原で急逝した俳優生活五十餘年を通じて常に熱と努力の人でありその重厚で滋味ある藝格は劇界の至寶であった

この碑は昭和廿六年六月故人を敬慕する全国の有志の醵金で建立された

井上正夫記念碑

所在地　愛媛県松山市湊町四丁目一　松山市駅　駅前

胸像

井上正夫の像

碑陰

その生涯は
高き芸への追求であり
その芸格は
劇界の至宝であった
こゝに
すべての芸術と
この人を讃えるために

１９５２年建立

本名　小坂勇一

俳優　日本芸術院会員
芸界生活　５４年
故郷　郊外砥部

南無三宝

七十歳に

はやとなり

昭和二四年　正夫

略歴

井上正夫　本名　小坂勇一　明治十四年六月十五日　愛媛県伊予郡砥部町に生まれる　昭和二十五年二月七日歿す　享年六十六歳　墓は東京都文京区大塚五-四十一護国寺墓地にある

井上正夫記念碑

所在地　愛媛県松山市湊町 4-4-1　松山市駅 駅前

井上正夫胸像

井上正夫の像

碑陰(上半分は横書き 下半分は縦書き)

(上半分)

その生涯は
高き芸への追求であり
その芸格は
劇界の至宝であった
―― こゝに
すべての芸術と
この人を讃えるために
１９５２年建立

―――・―――

本名　小坂勇一
俳優　日本芸術院会員
芸界生活　54 年
故郷　郊外砥部

(下半分)

南無三宝
七十歳
に
はやとなり
昭和二四年　正夫

略歴

井上正夫 本名 小坂勇一 明治 14 年 6 月 15 日 愛媛県伊予郡砥部村に生れる 昭和 25 年 2 月 7 日歿す 享年 68 歳 墓は東京都文京区大塚 5-40-1 護国寺の墓地にある

日本芸術院会員
俳優 井上正夫様

井上正夫記念碑

所在地　愛媛県伊予郡砥部町　大南中通

俳優井上正夫本名小坂勇一は明治十四年六月十五日父春吉母タイの間に長男として生れた。小学校卒業後種々苦難の道を歩み明治三十年五月松山市新栄座を初舞台として好きな芝居に情熱を傾け独力を以て常に新しいものを求めて芸道に精進し新派と新劇を超えた中間演劇を樹立した。

また井上演劇道場により映画に演劇に幾多の優れた俳優と劇作家を輩出しその高潔な人格と深く高い芸風は劇界の至宝であった。

昭和二十四年四月日本芸術院会員に推されたが翌年一月新橋演舞場を最後の舞台として二月七日湯河原で急逝した享年七十歳郷土愛媛の誇る偉大な芸術家としてその徳と芸を慕い郷党こぞってこの碑を建てた。

県都松山市駅前には胸像が建られている。

井上正夫会

井上正夫出生地

昭和甘年春　八木隆一郎書

碑陰

文字なし

井上正夫記念碑

所在地　愛媛県伊予郡砥部町　大南中通

井上正夫出生地

昭和廿八年春　八木隆一郎書（縦書き）

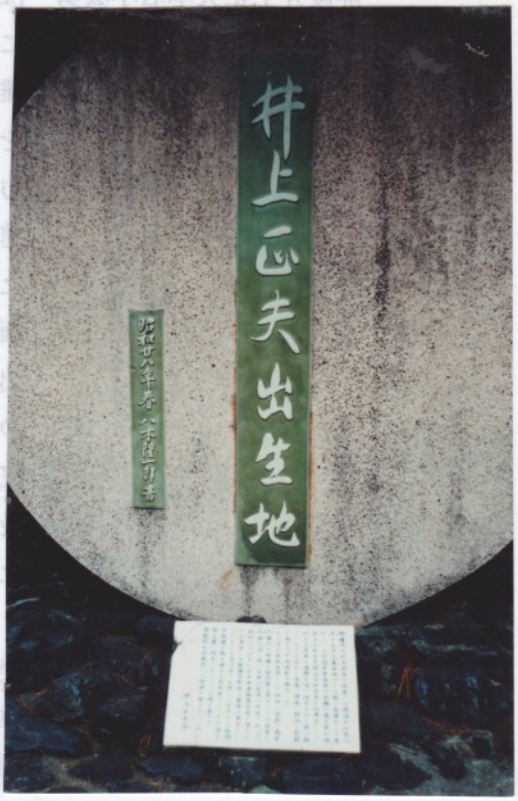
（この前に縦書きで次の文が書かれている）

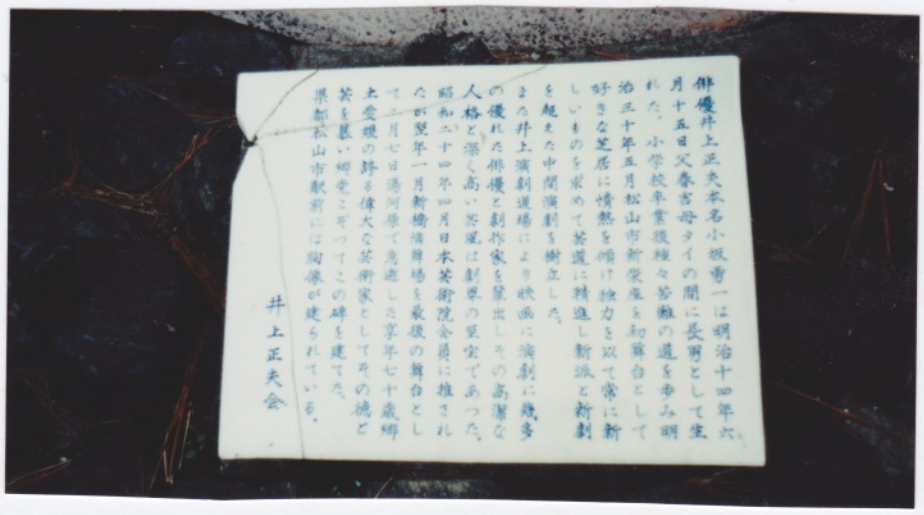
俳優井上正夫本名小坂勇一は明治十四年六月十五日父春吉母タイの間に長男として生れた。小学校卒業後種々苦難の道を歩み明治三十年五月松山市新栄座を初舞台として好きな芝居に情熱を傾け独力を以て常に新しいものを求めて芸道に精進し新派と新劇を越えた中間演劇を樹立した。
また井上演劇道場により映画に演劇に幾多の優れた俳優と劇作家を輩出しその高潔な人格と深く高い芸風は劇界の至宝であった。
昭和二十四年四月日本芸術院会員に推されたが翌年一月新橋演舞場を最後の舞台として二月七日湯河原で急逝した享年七十歳郷土愛媛の誇る偉大な芸術家としてその徳と芸を慕い郷党こぞってこの碑を建てた。
県都松山市駅前には胸像が建てられている。

井上正夫会

碑陰

文字なし





俳優井上正夫本名小坂秀一は明治十四年六月十五日父春吉母タイの間に長男として生れた。小学校卒業後種々苦難の道を歩み明治三十年五月松山市新栄座を初舞台として好きな芝居に情熱を傾け独力を以て常に新しいものを求めて芸道に精進し新派と新劇を超えた中間演劇を樹立した。

また井上演劇道場により映画に演劇に幾多の優れた俳優と劇作家を輩出しその高潔な人格と深く高い芸道は劇界の至宝であつた。昭和二十四年四月日本芸術院会員に推されたが翌年一月新橋演舞場を最後の舞台として二月七日渋河原で急逝した享年七十歳郷土愛媛の誇る偉大な芸術家としてその徳と芸を慕い郷党こぞつてこの碑を建てた。県都松山市駅前には胸像が建られている。

井上正夫会

井上政次文学碑

所在地　山梨県甲府市朝日三-八-三六　慶長院墓地　井上家墓域

大和の古美術といわず
凡そ古美術は古い。
が、それは
太陽が古いというように
古いのであり、
それは
古くて
いつも新鮮
なのだ。

井上政次

碑陰

これは井上政次著　角川文庫「大和古寺」の序文の一節である

自筆に拠る

井上政次は　明治三十五年三月　山梨県清川村の旧家に生れ　恩師先生　高弟の美学者　学徳はあまねく知られ　学に於ては子弟の教育　言教授の称号を受く　享年十二月十七日病を得て　境涯を閉づ　十年七回忌建之

妻　井上　たか子

長男　井上　正篤

たか子筆

次　明治三十五年三月二十二日　中巨摩郡清川村の旧家　れる　東北大法文学部　卒業　昭和四十四年十三月十七　日死す　享年六十七歳　法名　光厳　院徳潤眞常居士　墓は甲府市　朝日三-八-三六　慶長院墓地にあ　る

井上政次文学碑

所在地　山梨県甲府市朝日 3-8-38　慶長院墓地 井上家墓域

大和の古美術といわず
凡そ古美術は古い。
が、それは
太陽が古いというように
　古いのであり、
　それは
　古くて
　いつも新鮮
　　なのだ。
　井上政次

碑陰

これは井上政次著角川文庫
「大和古寺」の序文の一節である
自筆による
井上政次は明治三十五年三月
二十二日山梨県奇清川村の旧家に生れ
阿部次郎先生高弟の美学者
としてその学徳はあまねく知られ
郷里山梨大学に於ては子弟の教育
に専念し名誉教授の称号を受く
昭和四十四年十二月十七日病を得て
六十七年の境涯を閉づ
昭和五十年七回忌建之
妻　井上　たか子
長男　正　篤
たか子書

略歴

井上政次 明治 35 年 3 月 22 日 山梨県中巨摩郡清川村の旧家に生れた
東北大法文学部美学科卒業　昭和 44 年 12 月 17 日歿す　享年 67 歳
法名 光厳院徳潤眞常居士 墓は甲府市朝日 3-8-38 慶長院墓地にある

大和の古美術といえば
凡そ古美術は古い。
太陽が古いというように
古いのであり、
古くて
いつも新鮮なのだ。
岡倉覚三

大和の古美術といえば
凡そ古美術は古い。
太陽が古いというように
古いのであり、
古くて
いつも新鮮なのだ。
岡倉覚三

昭和五十年七月四日建之

井上たか子歌碑

所在地　山梨県甲府市朝日 3-8-38　慶長院墓地 井上家墓域

残されし
わかいのち
かも
遠く来て
薬師寺に
仰ぐ
天の
水煙

たか子

碑陰

井上たか子先生の傘寿を
記念して門下生一同之を
建つ

平成四年七月十二日
発起人代表
太田敦視
小林重光

残されし
わのいのち
うし
逝く者と
茶摘まれし
行く
去れば煙
たかこ

残されし
わのいのち
うし
逝く者と
茶摘まれし
行く
去れば煙
たかこ

先祖代々之墓
井上家

井上たか子先生の傘寿を
記念して門下生一同之を
建つ
平成四年七月十二日
発起人代表
太田敦視
小林重光